

見沼田んぼ福祉農園代表

猪瀬良一

埼玉県さいたま市



「子供に導かれて生きてきたような
ものですよ」

猪瀬良一（56歳）が代表を務める
見沼田んぼ福祉農園の設立を呼びか
ける運動を始めて20年。開園して7
年になる農園の活動を伝えながら、
猪瀬はそう言った。

猪瀬の長男・良太は自閉症児とし
て生まれた。現在、33歳。良太は毎
日、見沼田んぼ福祉農園での農作業

いう

「子供に導かれて生きてきた」と語る猪瀬。▶



猪瀬良一は、自閉症児の親となったことを契機に、農業を通じた障害者の自立と都市近郊に広がる農地の保存と活用を目指す、見沼田んぼ福祉農園を設立した。そこは単なる障害者福祉の場ではない。子供から高齢者までが、農に触れ、互いの関係性の中で現代社会に失われた人の繋がりを取り戻し、未来を生み出す学びの場にもなっている。そこには、過剰の時代であればこそ、農業の事業的可能性を予感させる何かがある。

（写真撮影＝見沼田んぼ福祉農園・昆彩子）

子供に導かれ、福祉農園という出会いと学びの場ができた

に出動している。

見沼たんぼ福祉農園は、さいたま市内の障害者団体に所属する障害者（知的障害、身体障害、精神障害）に農作業の場を作り、職業的自立の足がかりを与えるという目的で設置された。猪瀬は、それを単なる障害者のための福祉農園にとどめず、「見沼たんぼの農的な環境を生かしながら、『誰もが共に』自然とふれあい、農を楽しみ、人と出会い、関係を広げていける場」にしていきたいと考えた。

「見沼たんぼ」とは、川口市や東京の下町地域を洪水から守る調整地として、旧浦和市という東京近郊にもかかわらず1200ha以上の広大な農地が開発規制を受けて残された地域の呼称である。そして、見沼たんぼ福祉農園は埼玉県の「見沼田圃公有地化事業」の一貫として実現したものだ。

見沼たんぼ福祉農園が発足したのは1999年4月。猪瀬がそれを構想し、設立の呼びかけを始めた86年から数えて14年目の開園だった。さらに、開園から7年、耕作放棄されていた約1haの農地は、ボランティアの手によって整備され、約80aの畑に様々な作物が育つ農場になった。ここに至るまでには、多くの篤志家の支援や本田技研工業(株)からの

新・農業経営者ルポ／第25回

子供に導かれ、福祉農園と 出会いと学びの場ができた



▲「風の学校」は小松光一を校長に迎え、同氏の講義やリードによるスタディーツアーも行なわれる

▶様々な障害を持つ人々と健常者が「農」のある場であればこそその交流と気付きの中で育っていく



▶農園には「風の学校」という学生ボランティアのサークルがある。彼らは農場を支えるボランティアの中核であるとともに、福祉農園の未来を創る担い手でもある



「見沼学（みぬまなび）」

「風の学校」の学生たちが編集制作する、見沼たんぼの研究レポート。「見沼」と「ナビゲーター」を文字って「みぬまなび」と読む。土地の古老の話を元にその歴史を語り、福祉農園の成立に関わった人々の話から福祉と農を考える。福祉への関心から集まってきた若者が、やがて農業への関心を深めていく。

本の注文は、「見沼・風の学校」事務局（電話・FAX：048-886-5754）まで。



▲見沼田んぼ福祉農園はその趣旨に賛同した本田技研工業(株)からティラーや発電機の提供などの協力を受けている。筆者が訪ねた4月29日にも、同社の香川氏らが農園を訪ね、ボランティアたちに機械の整備と使い方の講習会が開かれた。同社のホームページには見沼田んぼ福祉農園と同社の交流が紹介されている。



◀猪瀬が導かれてきたという自閉症の長男・良太は、毎日農園に出勤している

農業機械の提供もあった。行政から農園管理運営費として一定の予算はつけられているが、猪瀬やボランティアたちは無給だ。

ボランティアの満足 が支える福祉農園

農園にボランティアとして参加した人々も多彩だ。

最初に集まったのは企業をリタイアした人々だった。彼らはシニアボランティアと呼ばれ、長く職業人として重責を果してきた人々ならではの見識と、子供時代の農作業経験が農園の大きな助けとなった。地域の農家もプロならではの技を伝え、古老は見沼田んぼの風土と歴史の語り部となってくれた。

学生たちも集まってきた。彼らが参加するようになり、一気にスタッフは100人規模に増え、農園は週末にも人が賑わう状態になった。学生たちはサークルやゼミのグループに参加者を増やしていった。大学のインターシップで参加して、そのままスタッフとなった者、農園のインターネットやメディアを見て集まって来る者もいた。

2002年から学生たちが中心になって始まった「風の学校」は、現在では毎週の行事となり、校長に小松耕一（法政大学・農業者大学校講

師）を迎え、夏には一週間のサバイバルキャンプ、地方の農家やタイの農村へのスタディツアーに出かけるようにもなった。学生たちは、さらに「のうぎょう少年団」を組織して子供たちを巻き込んだ。彼らが編集する福祉農園あるいは見沼田んぼの歴史を語るレポート「見沼学」も毎年発行するようになった。

開墾からの畑作り、竹と篠を使って暗渠も埋めた。堆肥を積み、溝掘り、草刈り、井戸掘り、種蒔き、草取り、間引き、収穫。そんな仕事で障害者が健常者と共に働き、薪を割り、かまどに火を焚き、料理をし、食べ、遊ぶ。その全てを通して、本来、人々が日々の暮らしや仕事のなかにあった、あたりまえな心の触れ合いや絆を取戻す。

ある時、シニアボランティアの実家から野菜の苗を大量に送ってもらったことがある。それに猪瀬がお金を払おうとすると、その人は笑ってお金を受け取らない。

「その代金をもらったら、仕事か商売になってしまっじゃないか。それじゃ面白いよ」

この言葉がボランティアたちの心を語っている。農園ボランティアたちが見沼田んぼ福祉農園や障害者を手助けする理由は、単に彼らが善意の人々であるからだけではない。む

子供に導かれ、福祉農園という出会いと学びの場ができた



▶「馬鹿でも大将」と笑う猪瀬は、学生ボランティアたちのオヤジ代わり。そんな彼の福祉と農業への思い、そして人柄が農園の理念になっている

しろ、農園に関わることでそれ自体がそこに来る目的なのだ。

障害者とともに季節のめぐりの中で働く。生産を目的とした職業的農業が捨てざるを得なかった、「農的暮らし」の豊かさでもいうべきものがここにはある。それが、人を惹きつけ、集う者の心を癒す。

障害者だけがいる、障害者だけに必要な福祉農園ではないのだ。

老人がいて、子供がいて、若者がいる。年配者が知恵を持ち、好奇心に満ち溢れた子供たちが駆け回り、若者が若者らしく活躍する。そこに障害者もいる。そんな空間というより関係性にこそ、人は居心地の良さ

を感じ、彼らが求めている何かがあるのだと思う。

遺伝子に書き込まれた人としてのあたりまえ

話は脱線するが、人間の赤ん坊はもとより、どんな動物の子供を見ても我々はそれを可愛いと思う。その可愛らしい顔や体格には、それを目にするだけで、大人や成獣に条件反射として子供を守る行動を取らせる動機付けの記号が仕込まれているのだそう。さらに、家族の夕食、子供を連れられた若夫婦。その人が属する文化の違いにもよるのかもしれないが、多くの日本人ならそれを見て心

が和むであろう。

そもそも、人の遺伝子の中には、誰かに必要とされ、喜ばれたい、弱き者を助けたいという欲求を持つように、書き込みがされているのだと思う。そして、あたりまえにいるべき人がそこにいる。しかも、その関係性が明確に示される場。それは人々に安心を与える。

そして、農的環境。仮にそれが擬似的なものであれ、多くの現代人は「農的」なものに憧れる。すでに我々は、農的暮らしがあたりまえであった時代に人々が夢見たことが実現された社会に生きている。にもかかわらず、人々は、量で測られる消費の豊かさの中で生きることと違和感を感じ始めている。それは、現代の日本人が、「欠乏」よりも解決が困難な「過剰の病理」の中にいるからだ。

現代人であればこそ不便を面白いと感じる。欠乏の歴史の中で人々が考え、獲得し、やがて失っていった技や知恵に出会うことで感激する。その中に示される透徹した自然理解に驚かされ、風土の意味に想いをめぐらせる。やがて、人々にとってはむしろ不便な、風土に根ざした暮らしや労働それ自体を求めようになり、雪下ろしツアーに参加する者や、田植えや稲刈り体験が観光

業者の企画足りえるのは、お金を払って作男になりたがる人々の「贅沢な要求」があるからなのである。家庭菜園で採れた作物は、経済的にみれば高価な野菜を買ったことと同じになったとしても、人々はそれに満足する。

使役ではなく、飢えに怯えて働くわけでもない。強要されてする労働は苦役であっても、本来、人は労働を喜びと感じる生き物なのではないだろうか。苦勞しても子供を育て、他者の面倒を見たいと思う。豊かさの中で少子化といわれる現象があるのは、実は、過剰の社会病理が人々の自然な欲求を抑圧しているからなのではないか。

過剰の病理の社会であればこそ、貧しくとも人や社会が本来持っていた関係性や風土の中にいる人間であることを気付かせ、そこにいることで癒される「場」が求められているのだ。

ここだからこそ学べることがある

見沼田んぼ福祉農園は、学びの場でもある。障害者を含む高齢者から子供まで、多様な知識や経験あるいは人生を背負った人々が、見沼田んぼという風土の中で、ともに作業し、遊ぶ関係の中で自ら学ぶ。学校はもとより教育力を失った家庭や地域に



▲湿地にある見沼田んぼ。排水を良くするために皆で大きな明渠を掘った。写真は、溝を掘り上げた皆の記念のショット。土を少し掘ると泥炭が出てきた。そこに見沼の土性と風土を学ぶ。こんな労働を共有した学生の仲間はここでの体験をどのように活かしていくのだろうか



▲週末には多くの人々が働き、学び、皆でご飯を食べる。そんな中に生まれる関わりが人を育てる



▲ご飯を炊くのも薪割りから始まる。カマドに火を点けるのもほとんどの若者にとっては初めての体験

代わる貴重な学びの場になっている。「のうぎょう少年団」は学生ボランティアたちが組織した活動であるが、単なるイベントとしての農作業体験の場ではない。作物の栽培やその前の土作りや畑作りも含めて、農園での仕事や遊びが、子供たちの日常生活の一部に組み込まれるような活動だ。かつて、子供たちが村の日常や大人の仕事の手伝い、あるいは大人たちの間に混じって暮らすことで獲得していった知恵。それを農園経営という連続性を持った「生きた場所」で、あるいは大人たちとの「関係性」から、子供たちに体験的に学ばせる機会がそこにはあるのだ。それは学生や親たちにも何かを与える。

農園は学生たちにとっては現代の「若衆宿」である。

猪瀬の次男・浩平（27歳）は東京大学大学院総合文化研究所に所属する文化人類学の研究者であるが、同時に、良太の弟として福祉農園に最初からかかわり、「風の学校」の世話役あるいは事務局長的役割を果たしている。

浩平によれば、多くの学生スタッフは「農園での障害者福祉」に関心を持って集まってきている。初めから農業に関心を持っていた者はむしろ少ない。にもかかわらず、農園で

の体験や出会いを通して農業に関心を持つようになり、作物のことが気になりだす。その個人の変化が組織としての風の学校の変化を導いている、と話す。風の学校は学生たちが農園に関わることを通して発生し成長しているのだ。猪瀬は、それが育つ土作りをしたのだ。

学生スタッフとして参加する者の多くは農業とは関係のない職場に就職していく。でも、次世代を担う人々として持つべき教養としてそこでの体験は大きな財産になるはずだ。

福祉農園の学生スタッフの一人に河合研（19歳）という青年がいる。多摩市にある農業者大学の学生であるが、ここではむしろ異色の存在だ。岐阜県の花農家の後継者で、同大学の講師を勤める小松光一のゼミ学生として、他の学生たちとともにここに来た。

その多くは単位を取るために先生に付いてきたのだろう。また、向学心の高い河合の友人は、農園での作物栽培の技術レベルを見て、「ここには学ぶべきものはない」と、それ以来、農園に顔を出すことはなかった。しかし、河合は毎週、

多摩にある学校の寮から時間を掛けてここに来る。学生スタッフの中心的メンバーの一人である。

栽培の不具合を調べるために学校

子供に導かれ、福祉農園という出会いと学びの場ができた



▲(上)左 皆に「リカルド」の愛称と呼ばれる河合研は農業者大
 学校の学生。現在では唯一の農業専攻学生だ。皆には「あいつは
 ナンパ目的でここに来ている」と冷やかされるが、その農業の知識
 と明るさと行動力で、彼は学生ボランティアや子供たちのアイ
 ドルの存在になっている。

に土壌サンプルを持ち帰り、簡易土
 壌分析をしてみるなど、農業専攻学
 生ならではの役割も果たす。しかし、
 河合は、友人が求めた「実利」では
 なく、他の学生スタッフやシニアボ
 ランティアたちとの出会い、あるい
 は福祉農園という活動そのものの中
 から、これからの農業経営者として
 持つべき本物の財産を得るだろう。

必要とされれば 得る利益は出るのだ

この障害者と健常者がともに学び
 あう福祉農園は、猪瀬良一が、良平
 という自閉症児を育てる葛藤と喜び
 を通して思い立ち、ボランティアた
 ちとともに創り上げてきたものだ。
 まさに、自閉症児である「子供に導
 かれて……」である。すでに、猪
 瀬の理想は半ば実現したかに見え
 る。

でも、障害者が農業を通して自立
 していくという福祉農園の最終テー
 マは実現できていない。ましてや、
 猪瀬やボランティアたちはそこから
 収入を得ているわけでもない。それ
 で良いのだろうか？ それではこの
 事業の永続性はないではないか。

繰り返しになるが、見沼田んぼ福
 祉農園は、現代という過剰の病理の
 社会であればこそ、現代に必要な生
 きるための癒し、学びの場を提供す

る。それは、障害者だけでなく誰に
 とっても必要とされる場なのであ
 る。であればこそその風の学校でもあ
 るのだ。

猪瀬を含めて、そこでボランティア
 として働く人々は、労働に対する
 金銭的対価が得られなかったとして
 も「損だ」とは感じないだろう。猪
 瀬を除けば、彼らにとってここに来
 ることは余暇であり、それ以上の満
 足を得ているからだ。

しかし、障害者たちはどうだ。そ
 もそも彼らがいればこそこの事業は
 始まっている。彼らの職業的自立を
 実現するためにも、この時代が必要
 とされる場を有償のサービスとして
 事業化すべきと考えても良いのでは
 ないか。その費用は必ずしも来園者
 に負担させなくても良い。儲けるた
 めにというより、農園の自立した永
 続性のために利益を出さねばならな
 いし、出すべきなのだ。

たとえば、フリーペーパーという
 広告だけで成立するメディアもある
 ではないか。福祉農園のウェブサイ
 トやイベントは、それは学生ボラン
 ティアの次の仕事、次の学びのテー
 マになるではないか。それで稼いだ
 お金を前にして、猪瀬に、
 「馬鹿でも俺が大将だ、ガハハハ」
 と彼に乾杯をさせてやる日を作って
 やれよ、若者たち！（昆吉則）